

「積極的な撤退」の理論的背景
The theoretical background of
“strategic rural reorganization study under a declining population”

前川英城
Hideki MAEKAWA

1. はじめに

我々の共同研究会が提唱する「積極的な撤退」について、「交通利便性のよさ」、「まとまって移転」が必要であるとする理論的な背景を、先行研究を整理することで示したい。

2. 交通利便性のよいところへ移転する理由

人口減少に伴いサービスを縮小したバスやタクシーの代わりに、住民は移動手段として自家用車を確保する。自家用車の普及によって、利用客がさらに減少するため、バス・タクシーは廃止・休業する¹⁾。高齢者や児童・生徒などの交通弱者は移動手段がなくなってしまう。その対策として、自治体はバス代行輸送や、近年では構造改革特別区域の指定などを受けて有償輸送に取り組んでいる（2006年11月現在で38自治体）²⁾。ただし、バス輸送はバス維持費などの経費がかかる。有償輸送はバス輸送よりも安上がりで次代の過疎地交通システムとして期待が持てるが、運転手自身も高齢者であることが多く³⁾、継続するうえで大きな障害となりうるし、著しく高齢化の進んだ集落ではそもそも運転手が確保できない。一方で、加齢に伴う身体機能の低下により、運転者自身が高齢者となり自家用車の運転が難しくなった時点で、移動手段は大幅に制限される。子供やその配偶者、あるいは集落住民に運転を頼むのは気を使うし、気兼ねするという高齢者も多い⁴⁾⁵⁾。高齢者は自らの意思で自由に移動できる手段を欲しているが、有償輸送の運転手すら確保できないところでは、その希望実現は絶望的である。このようなところでは、徒歩が唯一高齢者が持ちうる自由に移動できる手段となる。以上の点から、市町村内で最も交通利便性のよいところ、すなわち、徒歩商業施設や医療施設を徒歩で利用でき、他の市町村への移動は鉄道を利用できるようなところへ移転するのがよいと考えられる。

3. まとまって移転

3-1. まとまって移転する理由

高齢者は新しい環境に適応する力が弱く⁴⁾⁶⁾、特に、近所づきあいについては移転前のほうがよいと感じる割合が他の世代と比較して高い⁷⁾⁸⁾ので、できる限り移転前の近所づきあいが移転後も維持されることが望まれる。また、社会的・地理的な集落のまとまりという単位を崩して行政が個別に移転を進めると、「間引きだ」⁸⁾とか「強制されているような感じ」⁹⁾など、集落移転には一応合意していても、不満が残るおそれがある。以上の点から、集落のまとまりを維持した移転が望ましいといえる。

3-2. まとまって移転するための手段

そこで着目したいのが、集落のまとまりを維持するうえで重要な役割を果たしている宗教施設と共有林である。神社は集落の氏神を祀っており、神社の例祭は集落の結束を強める装置として機能している¹⁰⁾。寺院は皆で法話を聞いたり食事をしたりという娯楽とともに、精神的な支えを高齢者に供給する役割を持つ⁴⁾。また、共有林は文字通り集落住民の「共有」財産である。移転する際にこれらを残しておけば、まとまりを維持させ、同じ移転先に移住させることが期待できるが、旧集落の住民組織をそのまま復活させ移転先集落の住民組織に加入しない¹¹⁾、あるいは独立した区としての承認要求⁶⁾など、移転先住民との間に問題が生じるおそれがある。これを解決するには、話し合いに基づく双方住民の譲歩に委ねるしかない。

また、集落内での移転に関する合意形成も、全員がすべての点で一致することは難しいとしても、集落のまとまりを維持した移転には必要と考えられる。その際には、集落運営の中心となっている層の果たす役割が大きい。彼らが移転に対してどう反応するかで、他の人々の反応も決まってしまう場合が先行研究で観察されている¹²⁾¹³⁾。

4. おわりに

我々の共同研究会の目的の1つは、過疎地という「自立基盤を失った地域に取り残された人々」¹⁴⁾の救済方法を考えることにある。生まれ育ったムラが産業廃棄物処理場になるという苦渋の決断を住民にさせる¹⁵⁾ことは、何としても避けたいところである。住民の生活と共同体を守るため、また地域の環境の持続性を高めるためにも、具体的手法も含め「積極的な撤退」についての研究を進めていきたい。

本稿執筆にあたり、林直樹氏、一ノ瀬友博氏、齋藤晋氏、村上徹也氏をはじめとした共同研究会「撤退の農村計画」のメンバーの皆さまから多大なるご協力・アドバイスを頂きました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

引用文献

- 1) 吉岡雅光：過疎地域における人口還流の可能性，立正大学人文科学研究年報 39，pp.30-45（2002）
- 2) 日経グローバル 64，pp.24-27（2006）
- 3) 星場真人・小澤茂樹：過疎地における新たな交通機関の誕生－徳島県上勝町の事例から，運輸と経済 65(8)，pp.71-78（2005）
- 4) 乗本吉郎：過疎問題の実態と論理，富民協会（1996）
- 5) 山崎光博：高齢化に伴う農山村社会の変動，社会老年学 31，pp. 59-68（1990）
- 6) 松村真三・今井敏弘：余呉町の集落移転における地域の再編と生活の再編，農村計画 7，pp.35-39（1975）
- 7) 山口素光：山村社会の崩壊と挙家離村者の生活(2)－富山県婦負郡八尾町大長谷の場合，岡山大学教育学部研究集録 78，pp.39-61（1988）
- 8) 木村和弘：長野県における集落移転について(2)－小川村の集落移転とその後の生活の変化，農村計画 10，pp.4-14（1977）
- 9) 須永芳顕：集落移転の実態(1)－山形県小国町の事例，農業総合研究 30(1)，pp.131-157（1976）
- 10) 奥村晃代：集団離村，移住を画期とする村落祭祀の変容－滋賀県今津町の事例，帝塚山大学大学院人文科学研究科紀要 3，pp.19-34（2002）
- 11) 篠原重則：四国山地における集落移転とその諸問題－徳島県木頭村と愛媛県日吉村の事例，地理学評論 49(4)，pp.217-235（1976）
- 12) 川本彰：挙家離村の社会構造－島根賢一山村の事例，農業経済研究 39(1)，pp.35-43（1967）
- 13) 篠原重則：高度経済成長期における山村の変貌－愛媛県日吉村の廃村奥藤川と残存集落犬飼の対比，人文地理 28(6)，pp.86-106（1976）
- 14) 松下高輝他：廃村へのソフトランディング－市町村枠を超えた集落移転による過疎地域の再編，自治研究 69(4)，pp.98-121（1993）
- 15) 毎日新聞 2006年6月18日付